

# 現代における世代間交流と個人の アイデンティティ

今 西 康 裕

はじめに

1. 世代間交流の現状
  2. 世代間交流と青年のアイデンティティ形成
  3. 世代間交流と成人のアイデンティティ変容
- むすびにかえて

は じ め に

人間以外の他の生物や無機物との間においては定かではないが、人間と人間との間に成立するあらゆる諸関係においては、（その量的なバランスの不均衡は別にしても）双方向の影響が想定されない関係など考えられない。

人間の個と個との間に何らかの関係が成立する場合には、必然的にそこに相互作用が存在するのである。

にもかかわらず、いつの時代・どの地域にも普遍的にみられる「はやく大人になれよ」といった「大人」から「子ども」<sup>1)</sup>への忠告が端的に示すように、われわれはこうした「大人—子ども関係」において、子どもを未熟であり未だ発達の過程にあるもの、「完成された」大人にとってはそれほど重要な影響を与えない客体とみなし、さらには、その主体性や自発性を考慮することなく、大人を「社会化する者（socialization agency）」、子どもを「社会化される者（socializee）」と固定的にとらえ、大人から子どもへの一方向的な社会化作用に注意を集中してその逆のものを無視しがちなのである。

社会学という学問世界においても、この傾向は同様であり、特にデュルケムらに代表される方法論的集合主義といったマクロな分析的立場をとる人々と

っては、子どもは未だ十全に社会化されておらず、そのままでは自らの分析対象とはなり得ないものとして扱われ<sup>2)</sup>、子どもから大人へのいわば「逆の社会化作用」などはほとんど完全に考察の外におかれるのである。<sup>3)</sup>

しかし、「子どもに学ぶ」ことは何ら退行的なことではない。

わが国には「負うた子に教えられて浅瀬をわたる」といったことわざもあり<sup>4)</sup>、また、われわれは教師の「教え子に教えられた」という発言をしばしば耳にする。

フランスの思想家・哲学者、ジャン・ギドンも、ドイツの哲学者ハイデッガーから、真理というものは常にベールに覆われており、それを引きはがしてくれるものこそ子どもであると教えられ、かれ自身「人間は子どもとともに成長する」ことを確信している。<sup>5)</sup>

また、既存の生産中心・実利中心の存在様式に対する拒絶として1960年代中頃から本格化した学生紛争が、かなり大きな社会的再編成をもたらしたという事実は、いまなおわれわれの記憶に新しい。<sup>6)</sup>

さらに、今日の多様化・複雑化したファッション、メディア・情報環境にいち早く適応するのも「最先端の存在」としての子どもであり、かれらのこうした共通感覚、適応が社会全体に拡大されたり、他の諸分野にインパクトを与えることも実際にあり得るのである<sup>7)</sup>。

これらはすべて先に述べた逆の社会化作用の存在を判然と示すもの<sup>8)</sup>であり、われわれの日常生活の現実をより正確に把握しようとするならば、当然これらにも着目し、従来の社会化論にその論点を付加する必要がある。

そして、なによりも、これをぬきにしては社会変動というものを説明することとは、きわめて困難かつ不自然なものとなるのである。

E・フロムも主張するように、人間性のダイナミズムが社会過程の進化の動的な因子となるのであり、その意味で病める社会の規範や行動様式の子どもの一方的適用は、「正気の社会」の到来を永遠に阻害するのである。

ともあれ、こうした状況のなかで、近年では、「人間の成熟はその生涯にわたる過程において達成されるものである」とする生涯発達心理学の「発達」や生涯教育（学習）思想の広がりが見られるが、そうした潮流の源の一つとなり、

われわれの人間観の変革に思想面から広範な影響を与えた人物としてアイデンティティの概念の提唱者として名高いアメリカの精神分析学者、E・エリクソンを挙げることができよう。<sup>9)</sup>

かれは、従来の一方向的・固定的な人間観に修正を加え、「大人—子ども関係」の相互（依存）性を強調して、「漸成原理 epigenetic principle」に基づいたライフ・サイクル論（発達段階論）を展開した。これには、後述するように数多くの批判や問題点も寄せられているが、より新しい、しかも、われわれの現実により適合的な人間観に基づく理論構築を企図した点は正しく評価されるべきであろう。

そこで、本論では、このエリクソンのライフ・サイクル論の視点から、現代に特徴的な大人—子ども関係をながめ、そこに起因する問題のなかでもアイデンティティにかかわるものを分析し解明しようとするのである。

## 1. 世代間交流の現状

米国におけるプラグマティズムの代表的学者として著名なD・デューイはいう。

「子どもの生活を最も自由な、そして最もゆたかな社会生活たらしめるために、子どもはもっと大勢のおとなと、そしてもっと大勢の子どもと接触させられなければならない」<sup>10)</sup>と。

では実際に、今日の世代間交流とはどのようなものなのだろうか。ここではその把握につとめたい。

そこではまず、おさえておかなければならない大前提ともいうべき事実がいくつかある。

元来異世代というものは、その歴史的体験の相違から精神構造や価値観・行動様式に差異を生じ、相互理解に困難をきたしやすい。そこから必然的に、両者の関係性が希薄となり、（たとえ対立までには至らないとしても）お互いに無関心の態度をとったり、さらに相手への畏怖、侮蔑、羨望の入り混じった感情がエスカレートすれば、相手を「新人類」などと評して異端視し敬遠する傾

向があるということである。

また、今日においては、以下で詳述するように、異世代だけでなく、また年齢のいかんによらず、大人と大人、子どもと子どもとの関係性もが同時に著しく希薄化し、いわゆる世代内断絶・世代間断絶が進行している状況のなかで、「世代」という一つのまとまり自体の存在にも疑問符がつけられるのである。

ただ、今日の高度産業社会の成立に至る社会変容の過程が、反面、いや第一義的に、個人に集団の呪縛からの解放、人と人とが掛かり合う必要性の低下をもたらし、戦後民主主義の目標であったところの「個」の確立を促進したということとは看過されてはならない事実である。

高度産業社会は、ポジ・ネガ両方の意味で、人間を「個」（あるいは「孤」）に還元したのである。

すなわち、科学技術の飛躍的な進歩、情報化の進展は、われわれの生活をより便利で快適なものにするとともに、大人にとっても子どもにとっても直接に他者とかかわることやそうした対面場面から何らかの事柄を学ぶ必要性を低減させた。<sup>11)</sup> 子どもにとってはただ単に娯楽機能のみならず、広い意味での学習（教育）機能をも果たす「遊び」の領域においても他者の存在を必要としない「一人遊び」の可能性が拡大しており<sup>12)</sup>、また、こうした科学技術の発展に基礎をおく情報社会化は価値の多元化、宗教的規範の弱体化をも招来させ、この側面からも人間間の紐帯をゆるめた。

さらに、高度に発達した産業社会に特徴的な専門分化は、目的の効率的達成を促進する一方、各人の「専門家」・官僚機関への委託・従属を助長し、門外漢たる「しろうと」の無関心さらには無気力化からより広い範囲での「事なかれ主義」を生み出す。

地域社会のレベルにおいても、近年の就業構造の変化から、職住一致は崩れ、人々のホワイト・カラー化にともなって、子どもが活動する地域社会に昼間大人は存在しなくなり、かつては生業にかかわるために子どもの水・火遊びなどに対しても厳しい指導の姿勢となるなど、日常的に子どもと接していた「地域の大人」も姿を消して、地域社会が担っていた文化伝播機能も失われた。

また、その住民構成も激しく変化し、人口移動の増大から地域定着率は低下

して、人々が地域社会に対してもつ愛着や学校との相互作用も希薄となったことが、子どもたちに対するいわゆる「地域教育力」の衰退に結びつくであろう。<sup>13)</sup>

もはや、地域社会は「年長の子どもたち、若いおとなたちや、年とったおとなたちなどの接触とそれらへの実験的な同一化を提供する」<sup>14)</sup> 場としての機能を衰微させたのである。

そして、個々の家庭生活においても、全体社会を覆う人間疎外状況からの逃げ場を求める人々は、家庭にこれを求め、そこからの脱却を図るために、家族を単位としたさらなる人間の内閉化が進行し、産業社会に適合的な家族形態である核家族は世代間の交流をますます狭小なものとするのである。

これらをまとめれば、今日の社会的な変化、すなわち「ひと・もの（情報や技術を含む）・価値観」の流動化にともない、旧来的な人々の間の共同体験・共同性が喪失したという事実が明白となる。ここにさらに「よそ者」や「アカの他人」といった表現が象徴するような、もともと第三者には冷淡な日本人の文化特性<sup>15)</sup>が加味されれば、もはや家族などの少数の限られたものにしか親近感を抱きにくくなったわれわれ日本人は、周囲の他者をことごとく空々しい存在として究極的な心理的孤立状況にたちいたるのである。

さらに、特に子どもたちに直接的な影響を及ぼす全体社会状況として、今日の学歴社会化の影響を挙げることができる。

高度産業社会からの要請として、高収入や高い社会的地位を得る「社会的な成功者」となるためには高度な専門的知識・技能の習得を必要とされる現代の子どもたちは、これを獲得するため、さらには、開発・経済効率最優先の土地利用からくる地域社会での「遊び場」の消失ともあいまって、他者との出会いの場である地域社会とかかわる物理的・精神的余裕を喪失しており<sup>16)</sup>、この点からもそこで「多様な経験・体験を積む」というようなことはもはやなく、結果としてかれらの対（家族・親族外の）大人関係はせいぜい学校での教師との関係といった限定されたものとなるのである。

そして、このようにしていったん子どもと大人との関係が量的・質的に希薄化してしまうと、その希薄化自体が媒介変数となり、相互理解をより困難なも

のとして、さらなる相互の疎遠化、不信をよび、これがまたますます両者の関係を希薄化させる、という恒常的な循環の構図が完成されるのである。

次に、「子どもと大人との関係」において、その「大人」がどのような人間、すなわち子どもから見てどのような立場にある人間であるのかによってその関係性を「種類わけ」し、これまでの議論を再度整理してみたい。

一般に、他者との関係のもっとも大別的な分類は、年齢差などに基づく上下のタテの関係と友だち関係を中心とする対等関係たるヨコの関係への二分であろう。前者は規範意識の形成や弱者へのいたわり、競争や葛藤への耐性の習得に不可欠であり、後者によって双方向的な相互尊重の精神は醸成されるのである。そして、この両者が併存することによってはじめて人間の調和的発達が可能となるとされる。

「子どもと大人との関係」においては、それらはともあれすべてタテ関係であると見なされ得る。だが、ここでいうタテの関係・ヨコの関係とはいわば理念型であり、「純粋な」タテ関係あるいはヨコ関係というものは実際には考えられない。これらのタテ関係のなかにどの程度「ヨコの関係的な」相互性が含まれるかが、それらを個別化する際の基準となるのである。

また、発達課題論や発達段階論の教えるところによれば、人間の発達過程における他者との個別の諸関係には、それぞれその関係を取り結ぶ適当な時期、いわゆる「臨界期」と順序があり、それぞれの関係は他の関係では代替不可能なものであるという。

さらに、一つの発達段階における課題達成は次なる段階のこれ（発達課題達成）のためのレディネスとなるが、逆にこれが十全になされなかった場合には、その後の発達段階の課題達成に負の影響を及ぼすという。

これらの観点から子どもが取り結ぶ諸関係を具体的に見ていくならば、子どもがはじめて出会う人間であり大人である、親との不可避的な関係はやはり第一義的に重要な意味をもってくる。

元来、この関係は、子どもの自己形成に対して、快楽の付与と規律の行使という両面的な関係作用を及ぼしてきた。<sup>17)</sup>しかし、今日、これは「児童虐待」に見られるような全くの疎遠化か、あるいは「母子密着」に代表される、いわ

ば「フレンドリー・ファミリー」化ともいうべき濃密化の一方に大きく偏向しているといえよう。そして、そのどちらの傾向を強めるとしても、従来のこの関係のなかに見られた「タテ関係の側面」と「ヨコ関係の側面」とのバランスはいまや変容しており、その結果としてお互いの十全な意志疎通は達成されず、それはいわゆる家庭の「しつけ」機能の低下として表現される状況を生み出しているのである。

また、より広く、かつては強いむすびつきを有し、主に社会規範の子どもへの内面化を担っていた祖父母との関係<sup>18)</sup>をも含めた親族関係も、前述したように核家族化の進展等にもない、量的にさえ希薄化するなかでは、(無論、質的な濃密化はのぞめず)子どもたちはかつてなら以上のような血縁にもとづく諸関係を通して習得していた人間関係にかかわる基礎的な知識・技術を未修得のまま、いわば当然そこで達成されるべき発達課題を「積み残し」たまま、次なる血縁関係以外の一般的他者との人間関係に臨むのである。

そして、当然、こうした一般的他者との関係は「ヨコ関係の側面」の希薄なタテの関係である場合が多く、また、現代においては、このようなより「純度」の高いタテ関係構築の場面としてかつては制度化されていた子ども組や若者組といった世代間の地域組織自体そのものも減少した。その結果、かれらはこうした人間関係構築のための知識・技術と機会とを共にもたないという状況に陥り、なすすべがなく孤立し、またその孤立が(人間関係上の)基礎的知識・技術の未習得の常態化さらには対人関係の持続的な拒絶というより深い孤立に至るといった、ここでもまた循環の構図が完成するのである。

また、先述したように、このような状況のなかでは、教師との関係が現代の子どもたちにとってほとんど唯一ともいえる(親族外の)対大人関係となるが、これによってかれらは大人というものを相対視することを困難化させ、教師の自分に向けられた評価・ラベリングを絶対的なものとしてとりこみがちとなる。

さらに、こうした対教師関係でさえ、今日にあっては厳密な校則や規則による児童・生徒管理に基づいたものである場合が多く、子どもたちは教師に人間としての生き方など人格形成に関する指導を求めている<sup>19)</sup>にもかかわらず、教師はこれに十分に答えきれず、実際に学級担任の教師とさえ「心が通ってい

る」と認識している子どもは三割弱という数字<sup>20)</sup>や時として悲劇的な形で表面化したクラスのいじめ問題に対して、「自分のクラスにいじめがあるとは思ってもみなかった」という教師の発言にも表れているとおり、およそ本来的なタテの関係とはほど遠く、ここでも確実に子どもと大人との関係性の「質的」希薄化は進行しているといえるのである。

結果として、大人たちの間では、かつては存在した子どもの社会化に関する共通のシナリオが消失し、「総体として無意図的に協同していた社会化のエージェント」の「有機的連帯」も弛緩したといえることができよう。

そして、そこでは、関係性の構築・維持が与えるのと同様、その希薄化も大人、子ども双方にそれぞれ重要な影響を与えるのである。

## 2. 世代間交流と青年のアイデンティティ形成

われわれ人間は生物の中で、自分というものを認識している唯一の例であり、古来からの著名な哲学者たちの多くも「自己を知る」ことからその学究生活を開始した自己探求者であったといわれる<sup>21)</sup>。さらに、フロムは「人生におけるもっとも大きな仕事」とは、「人が自分自身に誕生を与えることであり、自分の内にある可能性を実現させること」であって、「人間が努力して作り上げるもっと重要な労作は、自分自身のパースナリティの形成である」<sup>22)</sup>と述べている<sup>23)</sup>。

また、われわれは、自らに与えられた地位・役割を、無感覚的にうけとり、完全な対応関係をもった上で遂行するのではなく、そうした役割にも常に「自分らしさ」を追い求め、社会的役割との距離的な適応をはかる。

人間にとって自己とのかかわりは不可避かつ根源的なものなのである。特に、「自己発見の可能性と自己喪失の危険性が、これほど密接に連携している段階は他に存在しない」<sup>24)</sup>といわれる青年世代にとっては、これはより危急で重要性を帯びたものとなろう。

かれらは自己の不変性と連続性が再び問題化するなかで、これまでの発達段階における同一化によって習得した社会的な諸価値を相対化し再編成して、さ



らにはその上に自分独自の価値体系を構築するという、いわゆるアイデンティティ形成の課題に直面するのである<sup>25)</sup>。

しかし、現代において、多くの青年たちはこの課題達成に悩み、「自分とは何か」という問いに十分な回答を見出せないままに心理的な<sup>26)</sup>モラトリアムに潜行する。あるいはさらに、真摯に自己を見つめようとすればするほど、自己のいわば負の側面が拡大される傾向のために、現在のありのままの自分というものをそのまま受け入れることができず、(拒食症や過食症にその典型を見るように)自らを削除や破壊の対象とするケースすら見うけられるのである。

そして、エリクソンも(青年期の)「この新しい同一化は、年長者たちとの、そして、年長者たちの中での社会性の吸収……《中略》……の中で達成される」<sup>27)</sup>と述べ、J・ボードリヤールも「昔の子供は異質な大人の世界とぶつかり、それを体験的に学びながら自己形成し、自分のアイデンティティを作り上げてきた。対立するものがない世界では自律した人間に成長するのはとても困難なこと」<sup>28)</sup>としているとおり、ここでも世代間交流が大きな役割を果たしているのであり、その今日的な変容による影響が考慮されなければならないのである。

そこでまず、青年のアイデンティティ形成を困難化させる諸要因をあえて大別するならば、これを直接的・積極的に阻害する要因と、その形成の必要性を低減するような、いわば結果としての阻害要因とが混在しているといえよう。

伝統的な共同体の崩壊と情報の氾濫によって従来までの絶対的な価値基準は消滅し、価値観の多様化した現代社会では、(そうであるがゆえになおさら必要とされるものであるにもかかわらず)一貫した行動の基準となるような堅固なアイデンティティを形成することは至難の業となった。その結果は、「アイデンティティを未決のままにとどめることが、現代社会に適応する上で最も機能的なパターン」<sup>29)</sup>となるまでに至り、また、こうした状況を現出せしめた今日の科学技術上の発展は、他方で、補助的装置を使った自己の能力の飛躍的拡大を実現したために、「どこまでが本当に自分(だけ)の能力なのか」という、自己領域の曖昧化をも生む結果となった。さらに、今日の発達加速現象と少子化にともなう子どもの希少価値性、豊かな産業社会に固有の現象である「子ど

も」でいることを長期にわたって強いる現代性<sup>30)</sup>との共存が、子どもたちの自己をめぐる意識に動揺を与えるものと考えられる。

一方、多様な情報メディアがつくり出す情報空間での人間関係は匿名的なものとなり、それぞれの人間がもつ個性性はそれほど重要な意味をもたなくなった。また、戦中および戦後直後のような「生きるか死ぬか」の時代からの脱却は、制度化された通過儀礼の減少ともあいまって「生」や自己というものを深く内省する機会を遠ざけ、これを漫然と継続させる姿勢を人々の間に創出させたのである。

しかしまた一方で、近年、身分制社会の完全な終焉、豊富な物質的基盤をもとに脱物質主義的な「いかに生きるか」といった主題を個人に対してつきつける個性重視・自己実現重視の社会風潮も高まっており——エリクソンが「アイデンティティ」の概念を提出したこと自体の社会的背景としてもこれを指摘することができようが——、こうした「個」をめぐるアンビバレントな状況そのものが、個人をダブル・バインドに追い込み、アイデンティティの形成を難しくする第三の傾向を形作るものともいえるのである。

また、青年のアイデンティティ形成に特徴的なのは、学校教育が決定的な影響力をもっているという点であろう。

すなわち、まず第一に、「高等教育は青年たちに自己のアイデンティティを内省的に問いなおす知的資源を与えた」<sup>31)</sup>がゆえに、このアイデンティティをめぐる問題の解決は、より重要性を増したのである。

しかし、そこではコーウィンが「教育遅滞」(educational lag)という言葉で表現した、学校の価値観と社会のそれとのズレがかれらを困惑させる。

すなわち、学校は、後にも見るように、依然として校則や規則によって統制された一元的な規律化社会であるのに対し、前述のごとく学校外の全体社会は、情報化の進展から価値の多元化が進み、社会秩序や社会規範が曖昧化した「逸脱許容社会」<sup>32)</sup>なのであり、その双方にかかわる子どもたちは、自らの行為基準の設定を困難なものとするのである。

また、今日においては生徒管理、知識・技能の効率的教授の面からも画一性・同質性が重んじられるのであり、「最大の効率の要請は、結果的には最小の個

人性の要請につながる」<sup>33)</sup> ために、各人の個性は軽視あるいは無視され、「効率は体制の中の人間的要因を考慮しなければならない」<sup>34)</sup> にもかかわらず、現代の学校には「私」を感じる空間が少なく、また、そこでは「現在の実存的時間よりも、むしろ将来の社会的成功に向けた投企的时间・計画的時間」<sup>35)</sup> が重視されるために、子どもたちはそのなかで自らのアイデンティティについて深く思索をめぐらすということも極めて困難な状況となったのである。

さらに、こうした効率のための管理を最優先させる学校教育の背後には、自明の強固な学歴社会という現代の一側面が存在する。

唯一かつ絶対の価値基準としての学力は、学校生活のみならず、人間の一生涯までをも規定することとなる。個人の獲得した学歴が、その人の文化また経済状況に大きな影響を与える職業選択を受動的・半自動的に決定するためである。そこから、「わが国で教育といえば、教養や人間形成のための『教育』（エデュケーション）よりも、教育資格や職業資格のための教育——『学歴稼ぎ』（クオリフィケーション）を意味する」<sup>36)</sup> という伝統はくりかえし継承されるのであり、その過程で、かれらは、高校・大学の難易度や偏差値といった外在的な基準によって自らの進路を決定していくために、（自己確立なども含めて）何事によらず自主的な方針決定に不慣れという側面を有するようになる。

そしてまた一方、幼時より激烈を極める学歴獲得競争にさらされる子どもたちは、それがあまりにも絶対的かつ大きな目的であるがために、他の目的をもったり、「自分」というものをゆっくり見つめる暇もなく、同時にこれらをもったり見つめようとも欲しなくなるのである。かれらは（特に「有名ブランド」大学の）学生という肩書でとりあえずは自らのアイデンティティの未定を埋めようと奮闘するが、またこの競争の結果も、勝者となり得るのは一握りのエリートに限られており、大部分のものは敗者としての否定的自己像を形成するに至るところから、自らのアイデンティティ形成をますます困難なものにするのである<sup>37)</sup>。

さらに、青年のアイデンティティ不定のより直接的な要因——それ自体これまでに見たマクロな、より間接的な諸要因に規定されるものであるが——こそ、今日における他者との関係性の希薄化であろう。

もちろん、他者以外にもわれわれのアイデンティティ確立に直接影響を与えるものは多い。

読書などによる「自己発見」の体験はだれしもが多かれ少なかれ経験するものであろうし、芸術的経験は「生命の秩序（全体システム）に触れることを通して、既存の自己を部分的に修正するという『治療作用』＝『生きる力』をもたらす」<sup>38)</sup>。また、宗教的経験は「自己システムと世界の両者の組み替え」<sup>39)</sup>を行う。

しかし、個人のアイデンティ形成に際して他者の存在は、これらに先んじ、またより重要なものである。

他者とは、まさしく文字どおり個人が一人の人間として生きていくうえでアイデンティファイ（同一化）するモデル・対象であり、また、G・H・クーリーの「鏡に映った自己」やG・H・ミードの「一般化された他者」の概念が示すように、われわれは他者の評価を反映させることによって自己認識を形成する。<sup>40)</sup> 例えば、個人の自律性と呼ばれるものも、他者からの承認を必要とするのであり、さらに、特に近代的個人の自己意識に関しては、優劣の比較意識がその中核にあり<sup>41)</sup>、また、「恥の文化」などの表現に象徴されるようにわが国では従来から他者志向性が根強いことなど、時代的・文化的な特殊要因も自己にとっての他者の役割をより重要なものとするのである。

ただ、もちろん、他者から付与される社会的な自己像と自らが構築する主観的な自己像とは、完全には重ならないということははっきり認識しておくべきであろう。われわれは生涯におよぶ社会化過程において、他者から付与される自己像を感得しこれを参照しながらも、それを超えて自ら主体的に自己像を構築していく生物有機体であり、これこそがアイデンティティ論の核心であるからである。

しかし、その前提にあるパラドクシカルな事実として、社会的な関係を回避したところに「私」の世界は存在せず<sup>42)</sup>、個人が自我境界を知覚してアイデンティティを形成するためには、このように多くの側面において他者の存在が必要不可欠なのである。

にもかかわらず、先にみたように、今日においては、こうした他者との人間

関係は、総じて（「タテ」「ヨコ」の別なく）希薄化してきている。

かつて、大人たちは、「はじめに」で述べたような旧来からの子ども観をもちつつ、今日以上に子どもに対して既存社会への適応を強いた。この事実は、しかし、その形はどうあれ、大人が子どもに今以上にかかわりあっていたことを示す。そして、このことによって、子どもは、既存社会の枠内ではあるものの、自身のアイデンティティを（今日よりはたやすく）構築することができた。

これに対して、現代の子どもたちは、少子化にともなう兄弟関係の変質によって、人間相互の協同関係や規約の遵守による規範の内面化を困難化させており、可処分所得の増大を前提として、趣味などの一致に基づく表層的または同質的なヨコの友人関係<sup>43)</sup>をかりうじて残存させるものの、そのコミュニケーション構造は、他との相互理解を欠いた自閉的かつ拡散的なものとなる。

そのため、そこからは、前述のような次なる関係構築のためのレディネス機能はほとんど見込めず、結果として、かれらは、こうした趣味の世界のような、外から切り離され閉ざされた領域において、自らのアイデンティティを見出そうとするが、関係性を確立するための機会そのものを減少させているタテの関係、すなわち世代間交流はますます脆弱なものとなるところから、自分とは異質な価値観を有する多様な他者との同一化、主観的側面の強いヨコの関係とは対照的に、冷静に客観的な立場から自分というものを判断してくれる中立的な判定者との関係を欠くために、その達成を困難なものとするのである。

今日において、世代間交流の希薄化は、青年のアイデンティティ形成に阻止的影響を与える有力な一要因となっているのであり、その結果、「本当に二人になること true twoness の条件は、一人一人がまず自分自身にならなければならない」<sup>44)</sup>にもかかわらず、自己確立が達成されない場合には、青年は対人関係において特殊な緊張——他者との暫定的なかかわりあい<sup>45)</sup>が、自己の同一性の喪失をひきおこし、対人的融合 interpersonal fusion になってしまうのではないかという緊張——を経験しがち<sup>45)</sup>であるために、「自己の同一性について確信のもてない青年は、人間関係の親密さからしりごみしてしまう」<sup>46)</sup>という、おなじみの循環の構図が導き出されるのである。

### 3. 世代間交流と成人のアイデンティティ変容

「はじめに」でも述べたように、どのような人間関係においても、相互作用をともしなわれない関係というものは考えられない。また、通常、個人は年齢を重ねるにつれ、その社会的な立場を多様なものとするのであり、この多様性を統合し、一つの「個」を維持するためにはかなりの労力が必要とされよう。

これらを考え合わせた場合、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返す存在として、われわれは「ライフ・サイクルの転機ごとにアイデンティティの危機を体験」<sup>(47)</sup>するのであり、人間の社会化は、その生涯をつうじてなされるものである、とするエリクソンの主張は、妥当性をもつものと言える。

特に、これまでに見たように、あらゆる人間が「個」に還元されつつある一方、医療技術の飛躍的な進歩によって、尊厳ある主体としての自己イメージをこれまでに増して長くもち続けられるようになった今日、成人層のアイデンティティの危機はより一般化しており、世代間交流の希薄化が、成人の側のアイデンティティに与えた影響をも考察される必要があるだろう。

エリクソンのライフ・サイクル論は、この青年期以降の社会化、いわゆる二次的社会的化・再社会的化の問題を考える上でも、注目に値するのである。

かれによれば、従来の精神分析学においても、その主要な関心は、個人の発達段階のうちエディプス期（3～6歳頃）の超自我形成に向けられており、それ以降の段階における自我の成熟の解明は不十分なものであったという。<sup>(48)</sup>

そこで、かれは幼児期から成人期にいたる個人の発達を、ライフ・サイクル論という一貫した枠組みのなかでとらえようと試みた。

その基本原理は、自我はいくつかの発達段階上の危機をのりこえながら、徐々に機能的な分化と統合を達成してゆくという、漸成原理である<sup>(49)</sup>。

そして、そのなかで成人期の発達課題とされるものこそ、ジェネラティビティ、すなわち成人各人が青年期のアイデンティティ危機をのりこえることによって確立した独自の価値基準にしたがって次の世代を育成することなのである。

さらに、その際に重要なことは、成人の側は単にナルシスティックに自分自

身のアイデンティティをおしつけるのではなく、より普遍的な人間的価値に立脚した「より広いアイデンティティ」<sup>50)</sup> に立って次の世代を導かなければならないのであり、この「より広いアイデンティティ」の獲得こそが、後続世代との相互作用をととして、成人が成熟した大人として社会化されるための要件なのである。

こうした考え方の背景には、アイデンティティ形成のためには特定のイデオロギーが制度的枠組みとなる<sup>51)</sup> という事実、アイデンティティの形成、無自覚化<sup>52)</sup> が一定の文化的価値への選択的関与<sup>53)</sup>、さらにはそうした価値を是認する特定社会への適応を意味するという事実が存在しよう。

この場合の適応は、あくまで当該社会の現実の価値基準（「ホンネ」）に適応していること（adaptation）を示すものであって、想定される究極的価値や文化目標（「タタマエ」）へのコミット（ajustment）を意味するものではない<sup>54)</sup>。

しかし、周囲の価値基準と適合しているがゆえに、われわれはそれを意識することともなくなり、次第にアイデンティティの無自覚化が進行するのである。

そして、このように常時には無自覚化されてしまっているアイデンティティの感覚が顕在化する一つの契機は、自らとは異なった価値観との接触（広義の「異文化接触」）時である。その際、われわれは、現実への適応と意味一貫性の保持を巡る緊張と葛藤を再び経験するのであるが、子どもとの相互作用こそ、まさにこの広義の異文化接触に該当するのである。

子どもという存在はいまだ当該既存社会の価値基準の強度や機能的な一貫性に無自覚的であるがゆえに創造性、独創性に富み、さらにこれまでの社会化過程において習得した当該社会が目指す理想的価値観を、その意味一貫性に基づいてとりあえずストレートに表現しようとする性向を強く有するために、前述のごとく大人の側もこれに触発され、自らの価値観さらにはアイデンティティを改めて問い直す可能性を秘めているのである。

このように、成人は次の世代との相互作用をつうじて自らもさらに社会化される存在であり、社会化過程においては世代間の相互依存性が存在するのである。

しかしながら、今日の世代間交流の希薄化は、こうした異世代間の相互依存

を困難なものとし、その結果として成人のアイデンティティも、その内部でかなり激しい動揺をくりかえし経験しながらも、それをうまく再構築して「より広いアイデンティティ」に到達することはできず、こうした結果そのものが内的不安を高め、また従来までのアイデンティティへの固執傾向をさらに強化するために、文化的目標にむかってのわれわれの歩みを遅滞させるのである。

### むすびにかえて

子どもから大人への一方的な影響のみが強調された従来の社会においても、両者の関係そのものは存立していた。そこでは、明確な形で語られなかったにせよ、後にエリクソンが示すように、子どもが与えた影響によって大人は自己の修正を行っていたものと考えられる。

ところが、今日、この両者の関係性は、先にも見たように、さまざまな要因によって希薄化した。その結果、子ども、大人共に安定したアイデンティティを得ることは困難となり、より高次の文化的目標へのわれわれの歩みは停滞して、こうしたアイデンティティの拡散は、いまや現代人の社会的性格と考えられるまでに至った。

そして、この不安定な自己は他者との直接のかかわりを嫌い、さらに世代間交流を希少なものとしていき、それがさらに自己を不安定なものに、という循環の構図を描く。

本論で私が明らかにしようとした現代的状況をより簡潔に描写するならば、以上のようなろう。

しかし、このように本論を展開していくなかで、私は多くの論理的矛盾や問題点と遭遇した。そして、そのなかには未だ十分に昇華し得たとはいえないものが残されているのである。

その一つが、本論が準拠したところのエリクソンのアイデンティティ概念を中心とした人格発達理論の限界である。

彼自身が認めるように、アイデンティティの概念は、その不明確性をどうしても払拭することができない。そのため、各人それぞれに微妙に異なった意味



をもって受け止められ用いられる結果、さらにその内容をあいまいなものとするのである。

また、より大きな問題として、かれの社会的な差異への無配慮を挙げることもできる。

かれが自らの理論構築のために参照としたのは、当然のごとく自身が居住した米国社会であり、考慮が及んだとしても、せいぜいそれは西欧社会に限定されたものであろう。

事実、彼が提示した八つの発展段階をすべての人が等しく経験することの根拠は、何も示されていないのである。

そこから、日本的自己認識の特殊性を検討する必要性が生じる。

周知のように、狭小な島国という国土のなかで、天然資源も乏しく、農業を生業としたわれわれ日本人の社会では、従来から「個」というものの主張よりも他者との関係性が重視され、これによって自己認識の内容や構造も規定される側面が強かった。

そこでは、「無我」が強調され、アイデンティティの形成よりもむしろ、その臨機応変さ、融通性・柔軟性に価値が置かれたのである。

こうした志向性そのものは現在もお根強く残存しており、その事実はエリクソンの主張する（西欧的な）青年期の発達課題を否定するものとなるのである。

しかし、より考察を深めるならば、「無我」の思想の内部には、「自己を求めて自己を越える」というプロセスが存在するのであり、そこではまず（「無我」の）前提条件としてより積極的な自己探求の営みが認められる。

また、エネルギーの外への発散によって、ストレスや緊張の解消をはかる西欧人とは対照的に、われわれ日本人は座禅による瞑想などに代表されるように、エネルギーを自己の内部に集中させることによって、またこれをはかる。

華道や茶道、俳句など多くの日本文化には皆ここからの発展を見出すことができるのであり、その意味でわれわれは自己を見つめる機会を数多くもってきたということもできるのである。

このあたりの議論の精緻化は別の機会に譲らざるを得ないが、ともあれ、今

後のアイデンティティ論の展開には、こうした社会的特殊性を考え合わせた比較文化論的視点が不可欠となろう。

そして、これを踏まえた上で、今日的なアイデンティティの拡散が青年、成人に与える影響の考察が必要であろう。

占いや新（々）宗教、オカルトなどの流行、さらに極度の清潔志向などは、いずれもこうした「自分で自分が何者かはっきりととらえられない」という「自己不安」に端を発するものと考えられるのであり、より恒常的な性格構造への影響として現代青年のステューデント・アパシーやナルシズム的傾向などを分析する必要があるのである。

また、そこでは、アイデンティティの形成を絶対視するのではなく、この未定がもたらすところの積極的側面にも目を向けることが不可欠であろう。

デカルトの「我思うゆえに我あり」の文言は、自己をめぐる苦悩それ自体が一つの自己証明になり得るという事実の後ろ盾となるものであり、（アイデンティティの）未定や拡散の危機は、その経験を通して人間的成長が図られ、より堅固な、あるいはまた「真の」とでも形容すべき自己が構築される可能性を含んでいるのである。

さらに、本論では、一貫して対人関係の希薄化を問題視しているが、この希薄化がいつの時点との比較であるかは不明確であること、その対人関係が直接的・対面的なものに限定した議論であり、マス・メディアを通じた間接的なこれへの言及が浅薄であったことは直ちに認められる。

特に後者に関しては、現代のマス・メディアの発達そのもの、あるいはこれによる個人の帰属空間の広がり、自己の意識形態やリアリティの感覚の変革、アイデンティティ形成の今日的な変容を促しており、これまでの直接的な対人関係からのアイデンティティ獲得とこれらとを十分に比較検討することが肝要であろう。

それなしには、過去を絶対視し、幻想に浸るのとは別の形の新たな世代間交流を創出することは困難であり、こうした新たな関係性の成立こそは、ピグマリオン効果によってこれを継続させ、本論で繰り返した述べたものとは逆方向の循環を描く可能性を秘めているのである。

註

- 1) 日常用語である「大人」「子ども」は、にもかかわらずその定義づけおよび二者間の境界が不明瞭で、共通認識がなされているとはいいがたい。法律上などでは20歳をその区別りとする場合が多いが、本論では、実際、学校教育段階の区切りがわれわれ人間の精神生活上大きな比重をもつことや、「大人」としての役割が猶予されるモラトリアム期たる青年期が今日延長されていることなども考慮して、やや広く20歳代後半までの、いわゆる誕生から青年期までの世代を「子ども」、これに続く成人期以降の年齢層を「大人」と大別し総称して用いる。なお、さらにその「子ども」のうち、より限定した年齢層の人々について議論する際には、その旨を明示する。
- 2) デュルケムは、教育を方法的・組織的社会化としてとらえ、これを定義して、「教育とは、成熟した世代によって、未だ社会生活に慣れない世代の上に行われる作用である。教育の目的は、全体としての政治社会が、また個人に対してとくに予定されている特別な環境が子どもに対して要求する一定の肉体的・知的および道徳的諸状態を子どもの中に出出させ、また発達させることにある」（デュルケム 佐々木文賢訳『教育と社会学』誠信書房 1976年 pp. 2-3）としている。
- 3) 「反抗文化」や「サブ・カルチャー」の理論に関しても、それらは最終的には支配的文化への繰り込みを想定しており、子どもと大人との相互作用を十全に考慮したものとは言えない。
- 4) その具体的事例は、日々の新聞紙上にも見だすことができる。そこには読者から寄せられた実際の体験談が掲載されており、例えば、最近（1994年）の『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊の「声」欄に限っても、「子どもに教わる思いやりの心」（5月2日付）、「相手の喜びを感じるとる幼女」（5月11日付）、「急がず少し待ちたい」（6月29日付）などがこれに当たるものと考えられる。
- 5) 1994年5月21日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊「天声人語」
- 6) これに関連して、E・フロムも、子どもたちから率直に当該社会への疑問をぶつけられることによって、親たちも刺激をうけ、より真剣でより能動的な世界観を獲得し、今まで絶望していた政治活動に新たな関心を抱くようになる、という事実を指摘している。（E・フロム 作田啓一、佐野哲郎共訳『希望の革命<改訂版>』紀伊国屋書店 1970年 p. 216 参照）
- 7) 今や「小さな消費者」として市場への参入が定着した子どもの動向は、生産者にとって最大の関心事の一つであり、新製品の開発に際してかれらの意見を取り入れる企業も着実に増加している。
- 8) さらに、教師のみならず、大人一般が子どもに対して何らかの事柄を教える際には、その事柄に関する大人自身の漠然とした理解を、さらに明確なものにすることが要求され、あるいは教えることによってより明確化するという、一種の自生的

な（「教えることは学ぶこと」という）自己教育の作用が生じるが、これもその一つとして挙げることができるだろう。

- 9) 他には、認知的発達論を展開し、デュルケムの教育研究を理論的に批判したスイスの心理学者J・ピアジェの影響を指摘することができる。かれによれば、教育の目的とは、自律の人格の育成であり、それを達成する教育方法としては、平等な個人の間に成り立つ自律的な相互関係（「相互尊敬」）が必要であるという。かれのこうした見解は、（エリクソンや本論の主張と軌を一にするものであるが）子どもを単に社会化の客体とみるのではなく、社会化における能動的主体とみなす点で特徴的なのである。（井ノ口淳三、近藤郁夫、窪島務編著『子どもに学ぶ教育学』ミネヴァ書房 1990年 p.56、北川隆吉監修『現代社会学辞典』有信堂 1984年 p.362 参照）
- 10) D・デューイ 宮原誠一訳『学校と社会』岩波文庫 1957年 p.46
- 11) 今日われわれは、わざわざ出向いて行かなくとも、電話・ファックスで用件を済ませることができ、身近な地域社会とはかかわらなくとも、これら情報機器等を通じて、より広い全体社会、さらには国際社会とのアクセスは可能である。
- 12) もちろん、ここでは「一人遊び」の量的な増加の可能性を指摘しているものであり、その（「一人遊び」の）人間発達における有用性については、エリクソンも指摘する（E・エリクソン 小此木啓吾訳編『自我同一性』誠信書房 1973年 p.106）通りであろう。
- 13) 逆に、子どもの側からの地域社会へのかかわり方に目を転じて、総理府の「青少年の社会参加活動に関する世論調査」（1990年）によれば、地域活動や社会福祉活動、または子ども会やスポーツの指導までをも含めたいわゆる社会参加活動について、「参加している」という者は15歳以上19歳以下で3.3%、20歳以上29歳以下では8.9%という低率であったという。（京都市『ライフ・コースから見た現代の青少年』1993年 pp.69-71 参照）
- 14) E・エリクソン 小此木啓吾訳編 前掲書 p.150
- 15) さらに、この特性を示すものとして、日本語には「私」、「うち」、「お前」など一人称、二人称の代名詞は数多いが、三人称のものとなると極端に少なく、そのなかで数少ない「彼」や「彼女」などもあまり日常的には使用されない、という事実を指摘することができよう。
- 16) 総理府広報室の「青少年の社会参加」（平成二年世論調査）においても、かれらが社会参加活動に不参加の理由として挙げる回答のなかでもっとも多いのもの（全体の45.3%）は「活動に必要な時間がないから」であった。（京都府総合府民部青少年課企画係編『京都府青少年プラン』1991年 p.71 参照）
- 17) 天野義智「アイデンティティの領域変容」『思想』1991年4月号 岩波書店 p.

- 18) また、「子どもは成長過程で祖父母の老化・病気（寝たきり）・死亡の過程を目撃し、その対極にある若さ・健康・生きる意味を考える機会をもっていた」（北川隆吉監修 前掲書 p. 356）のである。
- 19) 例えば、1991年8月16日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊「天声人語」によれば、高校教師の集まり、全国高校「倫理」「現代社会」研究会の、全国一万二千余人の高校生を対象とした調査の結果においても、このことは明らかにされているという。また、日本青少年研究所の「中学生の生活調査（1990年）の理想の教師像に関する問いに対しては、「生徒の気持ちを良くわかってくれる先生」と回答した中学生が62.1%と最も多く、高校生についても、総務庁青少年対策本部の「青少年の連帯感などに関する調査」（1990年）によれば、「サークル活動やクラブ活動を通じて生徒と接触する先生」という回答が最多の49.3%を占めた。これらからも、子どもたちは、何らかの形で自らとじかに接し、心情を理解してくれた上で、適切な指導をしてくれる教師を希求していることがわかる。（総務庁青少年対策本部編『平成三年版 青少年白書』大蔵省印刷局 pp. 93-95 参照）
- 20) 1993年6月9日付『朝日新聞（大阪本社版）』朝刊に掲載された、大阪市にあるくもん子ども研究所実施のアンケート調査の結果。金沢、大阪、広島、高松など全国10都市で1992年10月に実施。任意抽出した小五、中二、高二の合わせて3018人の子どもたちから回答を得たという。また、総務庁青少年対策本部の「少年の生活意識と実態に関する調査」（1988年）によれば、悩みや心配事があった場合に教師に相談する中学生は、全体の8.6%、同じく総務庁青少年対策本部の「青少年の連帯感などに関する調査」（1990年）では、高校生で個人的なことまでうちあけて話せる先生がいる、という者は34.8%と、一様に低率であった。（総務庁青少年対策本部編 前掲白書 pp. 91-92 参照）
- 21) 石田春夫『自己不安の構造』講談社現代新書 1981年 p. 12
- 22) E・フロム 谷口隆之助、早坂泰次郎訳『人間における自由』東京創元社 1955年 p. 278
- 23) ここでフロムは、「パーソナリティ」（原訳では「パースナリティ」）という言葉をつかっているが、これはまず、静的な概念であり、さらに、これの一般的用法には個人の統合性、一貫性を（全体社会内の）他者が客観的に判断したもの、「社会的自己像」のニュアンスが強い。だが、現実的にはわれわれは、そうした「他者の視点」をとりこみながらも、これらを主体的に統合し再編成してわれわれ自身の自己意識、「主観的自己像」を得ている。本論ではこうした各個人の主体性を重視する観点から、人間という生物有機体をさし示す概念として、より動的な概念でもある「アイデンティティ」という用語を使用する。
- 24) 草津攻「アイデンティティの社会学」『思想』1978年11月号 岩波書店 p. 128

- 25) 「自我同一性という形で、まざに行われようとしているこの統合は、児童期の種々の同一化の総和以上のもの」であり、これから自分になろうとする理想像を含みこんだものなのである。また、「たとえ、子ども時代の同一化群がいくら積み重ねられようとも、一個のパーソナリティの働きをもたらすことはでき」ず、逆に、それぞれの同一化はお互いに矛盾し合ったものとして、葛藤をもたらすこととなる。すなわち、すべての重要な同一化(複数)を包括しているが、それらの同一化を独自で適切なまとまりをもった全体として再構成したものとして、「青年期の終わりに確立される最終的な同一性は、過去の各個人とのどんな同一化をも超えたもの」となるのである。(E・エリクソン 小此木啓吾訳編 前掲書 p. 111, pp. 147-148 参照)
- 26) ここで「心理的」としたのは、学生という社会的地位にはもはやなく、就職して大人の役割を(表面的には)うまく演じている青年のなかにも、内面的にはそうした職業役割に自らを同一化させず非決定なままにいるモラトリアム人間が存在することを考慮したためである。
- 27) E・エリクソン 小此木啓吾訳編 前掲書 p. 145
- 28) 1994年2月28日付『朝日新聞(大阪本社版)』朝刊「天声人語」
- 29) 小谷敏編『若者論を読む』世界思想社 1993年 p. 76
- 30) 「若者に自由な時間を与えるる社会の側の豊かさと、社会の複雑化に対応するために求められる永い修学期間とが、モラトリアムの『制度化』を必然的にもたらした」(小谷敏編 前掲書 p. 56)のである。
- 31) 小谷敏編 前掲書 p. 40
- 32) 片岡徳雄編『教育社会学』福村出版 1989年 p. 177
- 33) E・フロム 作田啓一、佐野哲郎共訳 前掲書 p. 62
- 34) 同上 p. 65
- 35) 片岡徳雄編 前掲書 p. 158
- 36) 天野郁夫『学歴の社会史』新潮選書 1992年 p. 108
- 37) アイデンティティにとって肯定的な自己像は必須の要件である。
- 38) 桐田克利『苦悩の社会学』世界思想社 1993年 p. 122
- 39) 同上 p. 133
- 40) また、逆に、われわれは、他者との相互作用において自らの目的を達成するために、その目的に合致した役割とアイデンティティを他者に付与し、他者の自己提示に枠をはめ、相互作用を望ましい方向へとコントロールしてもいるのである。(草津攻 前掲論文 p. 124 参照)
- 41) 桐田克利 前掲書 p. 136
- 42) 芦沢俊介編著『少年犯罪論』青弓社 1992年 p. 244
- 43) 近年の子どもたちの友人関係に関しては、NHK放送文化調査研究所の「中学生

・「高校生の生活と意識」調査（1987年）によれば、かれらが「親友」と定義した者とのつきあい方においても、「心の深いところは出さないでつきあう」、「ごく表面的につきあう」という回答が合わせて中学生で43%、高校生で30.2%にのぼるといふ。（京都市 前掲書 pp. 71-72 参照）

44) E・エリクソン 小此木啓吾訳編 前掲書 p. 120

45) 同上 p. 164

46) 同上 p. 119

47) 片瀬一男「E・H・エリクソンにおける二次的社会化への視点」『社会学評論』135 1983年 p. 2

48) 同上

49) 同上 p. 3

50) 同上 p. 9 また、これの究極的なものが、小此木啓吾氏のいう「超越的同一性 transcendental identity」であろう。（下中邦彦編『新版 心理学事典』平凡社 1981年 pp. 2-3 参照）

51) 片瀬一男 前掲論文 p. 15

52) 「無自覚化」と（意味上の）近似の表現として「固定化」があるが、この場合には、ある個人が（可能性としては極めてわずかではあるが）現実の当該社会の価値基準とはかかわりなく、完全に究極的ともいうべき価値にコミットして生きることをも包含することとなる。これは本文後述の事実と矛盾するため、ここでは適切ではない。これに対して、「無自覚化」の場合は、当該社会の価値基準とのギャップから、常に自らのアイデンティティというものを自覚化させているであろう、前述の究極的価値への完全なるコミットのケースは除外されるためにより適切な表現となるのである。

53) 片瀬一男 前掲論文 p. 8

54) ここでの、adaptation と adjustment との対比は野村博氏に拠るものである。氏は、これらの語の語源から、adaptation (ad+apt+tion=順応) は、aptness (=inclination) であり、消極的な意味合いのものであるのに対し、adjustment (ad+just+ment=適応) は、justice への積極性を含むものとして、両者を区別している。（野村博『人間性と倫理』光彩社 1960年 pp. 165-166 参照）